

【 復活讃詞 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、
 天使軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか
 番兵 死 者 如 墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね
 立 爾 潔 體 尋

た り 。 なんぢはぢごくにいざなわれず
 爾 地 獄 誘

して、ぢごくをとりこにし、いのちをた賜
 地 獄 虜 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり
 者 處 女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにきす。
 爾 歸

【 降誕祭のアポリティキオン 第4調 】

ハリストスわが か み よ、なんぢの こうたんはせか
 我 神 爾 降 誕 世 界

いにちえのひかりをてらせり、これによ
 智 慧 光 照 此 由

りてほしにつとむるものはほしにおしえ
 星 勤 者 星 教



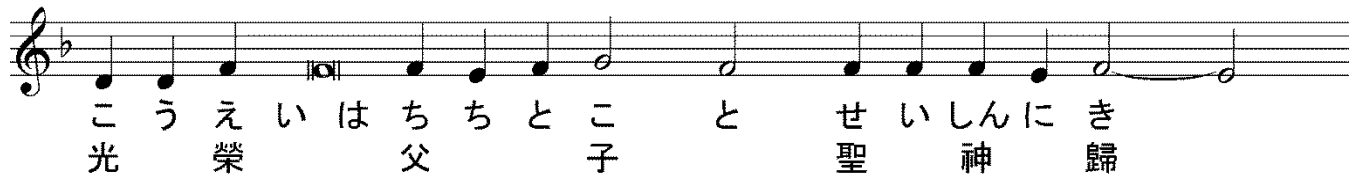
 ら れ て 、 な ん ぢ ぎ の ひ を お が み 、
 爾 義 日 拜
 な ん ぢ う え よ り の ひ が し を さ と れ り 。
 爾 上 東 覚
 し ゅ よ 、 こ う え い は な ん ぢ に き す 。
 主 光 榮 爾 歸

【 聖人等のアポリティキオン 第2調 】

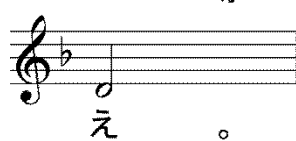
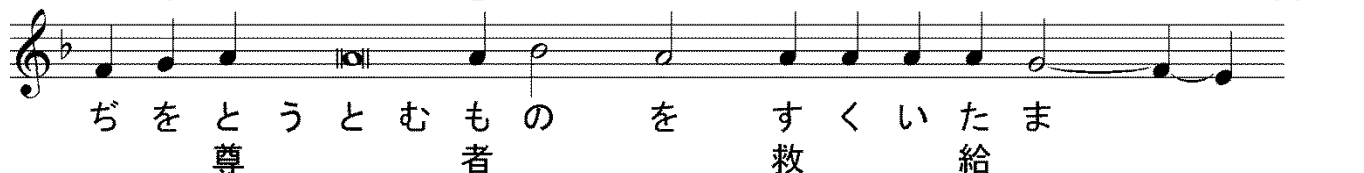
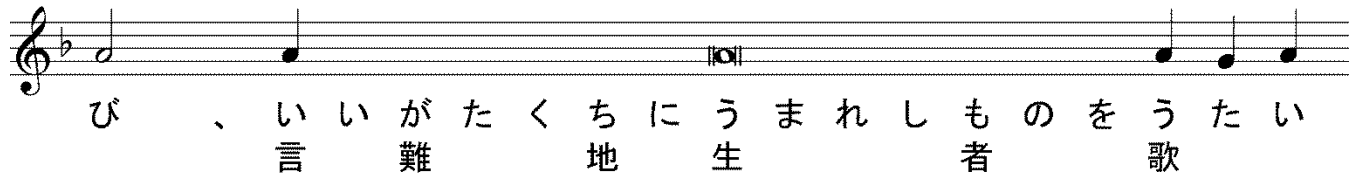
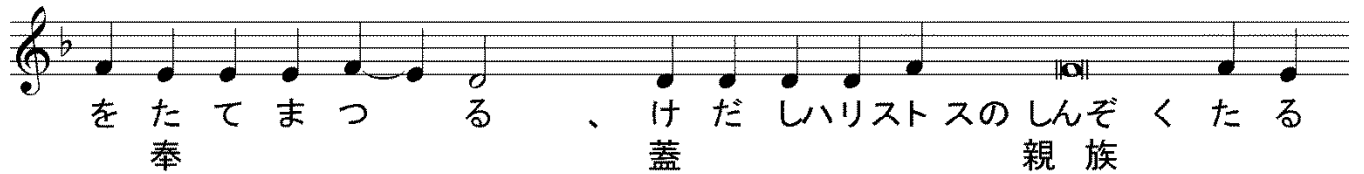
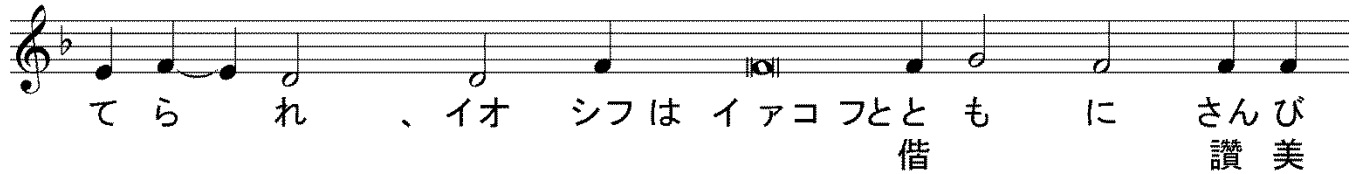
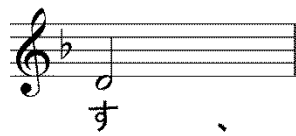


 イ オ シ フ よ 、 か み の せん ぞ ダ ヴ ィ ド に き せ き を ふ く い ん
 神 先 祖 奇 蹟 福 音
 せ よ 、 な ん ぢ は う み し ど う て い ぢ よ を み 見
 爾 生 童 貞 女
 た り 、 ほ く しゃ と と も に さ ん え い せ り 、
 牧 者 偕 讚 榮
 は か せ と と も に ふ く は い せ り 、 て ん し
 博 士 偕 伏 拜 天 使
 よ り つ げ を う け た り 。 ハ リ ス ト ス か み
 黙 示 受 神
 に わ れ ら の た ま し い を す く わ ん こ と を い の り
 我 等 靈 救 祈
 た ま え 。
 給

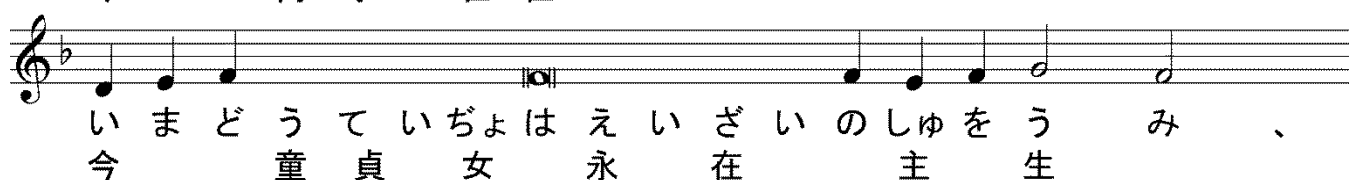
【 聖人等のコンダキオン 第3調 】



 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き
 光 榮 父 子 と 聖 神 歸



【 降誕祭のコンダキオン 第3調 】



ち は の せ が た き も の に ほ ら を け ん ず 、
 地 載 難 者 洞 獻
 て ん の つ か い は ぼ く し ゃ と と も に ほ め う た い 、
 天 使 牧 者 借 讃 歌
 は か せ は ほ し に し た が い て た び す 、 け だ 蓋
 博 士 星 徒 旅
 し わ れ ら の た め に え い き ゆ う の か み は み ど
 我 等 爲 永 久 神 嬰
 り ご 児 と し て う ま れ た ま え り 。
 児 生 給

司祭) (黙誦： ^{せい} 聖なる神、^{かみ} 聖者の中に^{せいじゃ} 息い、^{うち} セラフィムより^{いこ} 聖三の聲を以て歌頌せられ、
^{せいさん} ヘルヴィムより^{こえ} 讃榮せられ、^{もつ} 悉くの^{かしよう} 天軍より^{かしょう} 伏拝せられ、^{かしょう} 萬物を無より有と
^{さんえい} なし、^{ことごと} 人を^{てんぐん} 爾の像と^{ふくはい} 肖とに依りて^{ばんぶつ} 造り、^む 爾が^{ゆう} 諸の賜を以て之を飾り、
^{ひと} 願う者に^{なんぢ} 智慧と^{ぞう} 明悟とを^{しょう} 與え、^よ 罪を行^{つく} う者を^{なんぢ} 棄てずして、^{もろもろ} 其救の爲に^{たまもの} 痛悔
^{ねが} むる祭壇の^{ちえ} 光榮の^{めいご} 前に^{あた} 立ちて、^{つみ} 爾に^{おこな} 當然の^{もの} 伏拝讃榮を^す 奉るに^{そのすくい} 堪うる者と
^た なしし^{われらいや} 主宰よ、^{ふとう} 爾親ら^{なんぢ} 我等^{しよぼく} 罪人の^こ 口よりも^{とき} 聖三の^{おい} 歌を受け、^{なんぢ} 爾の^{せい} 仁慈を
^{もつ} 以て^{われら} 我等に^{のぞ} 臨み、^{われら} 我等に^{およ} 凡そ^{じゆう} 自由と^{じゆう} 自由ならざる^{つみ} 罪を^{ゆる} 赦し、^わ 我が^{たましい} 靈と^{からだ} 體と
^{せい} を^{われら} 聖にし、^{しょうがいぜんこう} 我等に^{もつ} 生涯^{なんぢ} 善功を以て^{つと} 爾に^え 務むるを^{たま} 得せしめ^{せい} 給え、^{せい} 聖なる
^{しょうしんぢよ} 生神女と^{こせい} 古世より^{なんぢ} 爾の^{よろこび} 喜を爲しし^な 諸聖人との^{しよせいじん} 祈禱に^{きとう} 依りてなり、)

司祭) 蓋 ^{けだしわ} 我が^{かみ} 神よ、^{なんぢ} 爾は^{せい} 聖なり、^{われら} 我等^{こうえい} 光榮を^{なんぢ} 爾父と^こ 子と^{せいしん} 聖神に^{けん} 献ず、^{いま} 今も^{いつ} 何時も^{よよ} 世世
 に、



【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い な る
聖 神 聖 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
常 生 者 我 等 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅 、 せ い
聖 神 聖 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
常 生 者 我 等 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 毅
聖 神 聖 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 殺 聖 常 生 者 我 等 を
 あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世に、)

【 提綱 (プロキメン) 主日第6調及び聖人等の第4調 】

司祭) 慎みて聽くべし、衆人に平安、

なんぢのしんにも。
 爾 神

司祭) 睿智、

誦經) プロキメン、主よ、爾の民を救い、爾の業に福を降し給え、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
 主 爾 民 救 爾 業
 ふくをくだしたまえ。
 福 降 給

誦經) 主よ、我爾に呼ぶ、我の防固よ、我が爲に黙す母れ、

しゅよ、なんぢのたみをすくい、なんぢのぎょうに
 主 爾 民 救 爾 業
 ふくをくだしたまえ。
 福 降 給

誦經) 神よ、爾は爾の聖所に於て嚴なり、



か み よ 、 なんぢ は なんぢ の せいしよ に お い
 神 爾 爾 聖 所 於

て お ご そ か な り 。
 嚴

【 使徒經 (アポストロス) 200 端 ガラティヤ書 1 章 11 節～19 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしと} 聖使徒パヴェルがガラティヤ人^{じん たつ}に達する書^{しよ よみ}の讀、

司祭) ^{つつし} 謹 ^きみて聽くべし、

誦經) ^{けいてい} 兄弟よ、我 ^{われ} 爾 ^{なんぢら} 等^つに告ぐ、我^わが傳えし福音^{ふくいん}は人^{ひと}に由るに非ず。蓋 ^{あら} 我 ^{けだし} 人 ^{われ} より之 ^{これ} を受け、

^{これ} 之 ^{まな} を學びしに非ず、 ^{あら} 乃 ^{すなわち} イイスス ^{もくし} ハリストスの默示^よに由るなり。 ^{なんぢら} 爾 ^わ 等^{さき}は我^きが先^きにイウデ

^{きょう} ヤ教^あに在りし時^{とき}に行いし所^{おこな}を聞けり、即 ^{ところ} 我 ^き 甚 ^{すなわち} しく神^{われ}の教^は會^なを窘逐^はし、之^{かみ}を

^{ざんがい} 殘害^{かつ}し、且 ^{きょう} イウデヤ教^{しんぼ}に進歩^わして、我^{どうぞく}が同族^{うち}の中^{とし}の年^{あい}相若^{ひと}しき多^{おお}くの人^{ひと}に越^こえ、極

^{せんぞ} めて先祖^{いでん}の遺傳^{ねつちゆう}に熱^{しか}中^わせり。然^はれども我^はが母^はの胎^はより我^{われ}を簡^{えら}びて、其^{その}恩^{おん}寵^{ちゆう}を以^{もつ}て

^{われ} 我^めを召^{かみ}しし神^{よろこ}が、悦^{その}びて、其^わ子^{うち}を我^{あら}が内^{われ}に顯^{これ}し、我^いをして之^{ほうじん}を異邦^{ふくいん}人^{ふくいん}に福^ふ音^{いん}せしめ

^{とき} んとせし時^{われ}、我 ^{ただち} 直 ^{けつ} に血 ^{にく} 肉 ^{あい} と相 ^は 謀 ^は らず、亦 ^{また} イエルサリム^{のぼ}に上^{われ}りて我 ^{さき} より先^{しと} に使徒^なと爲^なり

^{もの} し者^みを見^{すなわち}ず、乃 ^ゆ アラヴィヤ^{のち}に往^{また}き、後 ^{かえ} 亦 ^つ ダマスク^{さんねん}に返^これり。嗣^こぎて三 ^{さん} 年^{ねん}を越^こえて、ペト

^み ル^{ため}を見^{のぼ}ん爲^{じゆう}にイエルサリム^ごに上^にり、十 ^{じゆう} 五 ^ご 日 ^に 間 ^に 彼 ^{とも} と偕^いに居^たたり。他^{しと}の使徒^{しゆ}は、主^{けいてい}の兄 ^{けいてい} 弟 ^い イ

^{ほか} アコフ^{だれ}の外^み、誰 ^み をも見^みざりき。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。あなたがたに、はっきり言うておく。わたしが宣べ伝えた福音は人間によるものではない。わたしは、それを人間から受けたのでも教えられたのでもなく、ただイエス・キリストの啓示によったのである。ユダヤ教を信じていたころのわたしの行動については、あなたがたはすでによく聞いている。すなわち、わたしは激しく神の教会を迫害し、また荒しまわっていた。そして、同国人の中でわたしと同年輩の多くの者にまさってユダヤ教に精進し、先祖たちの言伝えに対して、だれよりもはるかに熱心であった。ところが、母の胎内にある時からわたしを聖別し、み恵みをもってわたしをお召しになったかたが、異邦人の間に宣べ伝えさせるために、御子をわたしの内に啓示して下さった時、わたしは直ちに、血肉に相談もせず、また先輩の使徒たちに会うためにエルサレムにも上らず、

アラビヤに出て行った。それから再びダマスコに帰った。その後三年たってから、わたしはケパをたずねてエルサレムに上り、彼のもとに十五日間、滞在した。しかし、主の兄弟ヤコブ以外には、ほかのどの使徒にも会わなかった。

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、アリルイヤ、

【 アリルイヤ 主日第6調及び聖人等の第4調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しじょうしゃ おおい した おもの ぜんのおしや かげ した やす} 至上者の覆の下に居る者は、全能者の蔭の下に安んず、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ そのことごと うれい きおく} 主よ、ダヴィドと其悉くの憂とを記憶せよ、

ア リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ
 を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
 なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん
 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
 いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ
 て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

【 福音經 (エヴァンゲリオン) マトフェイ福音書4端 2章13~23節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、

司祭) 博士の歸りし後、視よ、主の使夢にイオシフに現れて曰く、起きて、嬰兒と其母
 とを攜えて、エジプトに奔り、彼處に在りて、我が爾に告ぐるを待て、蓋イロドは嬰兒を索
 めて、之を殺さんと謀る。彼起きて、夜間嬰兒と其母とを攜えて、エジプトに往き、彼處に
 在りて、イロドの死するに至れり。是れ主が預言者を以て言いし所に應うを致す、云く、我
 吾が子を召してエジプトより出せりと。當時イロドは己が博士に欺かれたるを見て、大に怒
 り、人を遣して曾て詳に博士に問いし時を按り、ヴィフレム及び其四の境の内な
 る二歳以下の嬰兒を盡く殺せり。是に於て預言者イエレミヤの言いし事應えり、云く、
 ラマに悲み哭き甚しく號ぶ聲は聞ゆ、ラケリは其子の爲に哭きて、慰むるを欲せず、子
 の無きが故なりと。イロドの死せし後、視よ、主の使エジプトに於て夢にイオシフに現れて曰
 く、起きて、嬰兒と其母とを攜えて、イズライリの地に往け、蓋嬰兒の生命を索むる者は死

せり。彼^{かれ}起^おきて、嬰^お兒^さと其^{その}母^はとを攜^たづ^づきて、イヅライリの地^ちに來^きたり。唯^{ただ}アルヘライが其^{その}父^{ちち}イロ
 ドに繼^つぎて、イウデヤに王^{おう}たりと聞^ききて、彼^か處^こに往^ゆくことを懼^{おそ}れ、乃^{すな}わち夢^{ゆめ}の内^{うち}に默^{つげ}示^えを得^えて、ガ
 リレヤの境^{さかい}に往^ゆき、ナザレトと名^なづくる邑^{まち}に來^きりて、此^こに居^おりたり、諸^{しよ}預^{よげん}言^{しゃ}者^{もつ}を以^{もつ}て、彼^{かれ}は
 ナゾレイと稱^{とな}えられんと、言^いわれし事^{こと}に應^{かな}うを致^{いた}す。

(比較用 口語訳) 博士らが帰って行ったのち、見よ、主の使が夢でヨセフに現れて言った、「立って、幼な子とその母を連れて、エジプトに逃げなさい。そして、あなたに知らせるまで、そこにとどまっていなさい。ヘロデが幼な子を捜し出して、殺そうとしている」。そこで、ヨセフは立って、夜の間に幼な子とその母とを連れてエジプトへ行き、ヘロデが死ぬまでそこにとどまっていた。それは、主が預言者によって「エジプトからわが子呼び出した」と言われたことが、成就するためである。さて、ヘロデは博士たちにだまされたと知って、非常に立腹した。そして人々をつかわし、博士たちから確かめた時に基いて、ベツレヘムとその附近の地方とにいる二歳以下の男の子を、ことごとく殺した。こうして、預言者エレミヤによって言われたことが、成就したのである。「叫び泣く大いなる悲しみの声がラマで聞えた。ラケルはその子らのためになげいた。子らがもはやいないので、慰められることさえ願わなかった」。さて、ヘロデが死んだのち、見よ、主の使がエジプトにいるヨセフに夢で現れて言った、「立って、幼な子とその母を連れて、イスラエルの地に行け。幼な子の命をねらっていた人々は、死んでしまった」。そこでヨセフは立って、幼な子とその母とを連れて、イスラエルの地に帰った。しかし、アケラオがその父ヘロデに代ってユダヤを治めていると聞いたので、そこへ行くことを恐れた。そして夢でみ告げを受けたので、ガリラヤの地方に退き、ナザレという町に行き住んだ。これは預言者たちによって、「彼はナザレ人と呼ばれるであろう」と言われたことが、成就するためである。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③ (金口イオアン聖体礼儀) へ